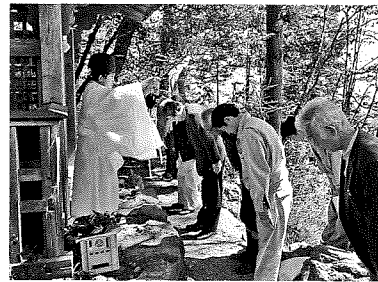


御嶽神社 あわれっくれ

お宝が眠る奥の院

御嶽山の奥宮にはお宝が埋まっている。そんな話し聞いたことありますか。山で生まれ育った人間は皆聞いたことがあります。山を掘り返して探そうとする人はお宝と聞くと、皆様先を急いでしまいますが、宝といっても埋蔵金ではございませんから、ゆつくりと思いを馳せながらお読み下さい。はてさて、そんな宝とは。お宝伝説の載る、昔の書物から紐解いてみましょう。新編武蔵風土記稿*によると、東征の折、御嶽山中で悪神に道を阻まれ、五里霧中となった日本武尊を白狼が救い導いた。そして尊がこの地で火難盗難退除の守護神となるよう白狼に命じ、以降御嶽大神のお使いとなった。そして、東征を終えた尊が御嶽山へ戻り、奥の院に武具を納めた事から甲羅山



(高良山)ともいわれている。とございます。原文の下りでは「さて尊は事成らきて再びこの山にかへり給い御身につけ給いし御鎧をとかせられ永く岩倉に納め給う、これ当国のに名を得しことなり」ともございます。この文は武具を納めた岩倉(蔵)があるの、この国の名が武蔵の國となつたと書いてございます。日本武尊は、この御嶽山の地に東征の共となつた御鎧を鎮められたのです。では埋まっている宝とは、尊の御鎧の事でしょうか。尊は此の地に何を、なぜ鎧をうめたのでしよう。東征への報復というのも一つの理由でしょうが、古事記の東征の項では、東京湾を渡る際に海が荒れ、妃の弟橘姫が入水し自害することにより、嵐を静め平定を終えた。尊は帰る途中、東京湾を振り返り「我が妻よ」と言ったことから、その地を吾妻と呼ぶようになったという哀しい逸話や、尊は大和*に帰り「大和は国のまほろば たなずく青垣 山こもれる 大和しうるわし」と詠んだ、などとあり、こよなく大和



を愛していたことが伺えます。ここ御岳山から大岳山にかけての山並みは、大和を思わせるところが多分にあり、奥の院から朝日に照らされた東京湾の光輝く姿を一望すると、まさに尊の足跡の場所とも思われ感慨が深くなります。そして、奥の院への参道には、弟橘姫を祀った碑や縁あると伝わる奇岩などもございます。日の出山には尊が後ろを振り返り、顎を寄せ、遠くをながめながら大和を懐かしんだと云われる、「顎かけ岩」や、ふもとの、梅で有名な吉野の地名は、御嶽山からの眺めが大和の眺めに良く似ていることから、奈良*の吉野から取ったとも云われています。一歩足を踏み込めば、靈気が一層と漂う奥宮の地。大和を偲ばせる此の地の何処かには、尊の使われた鎧が、妻の眠る東京湾を望みながら、尊の想いと共に、今もひっそりと鎮まっているのです。この美しい逸話への想いこそが、そして皆様の心に刻まれた見えな何かこそが、奥の院に鎮まっている本當の宝なのです。

を愛していたことが伺えます。ここ御岳山から大岳山にかけての山並みは、大和を思わせるところが多分にあり、奥の院から朝日に照らされた東京湾の光輝く姿を一望すると、まさに尊の足跡の場所とも思われ感慨が深くなります。そして、奥の院への参道には、弟橘姫を祀った碑や縁あると伝わる奇岩などもございます。日の出山には尊が後ろを振り返り、顎を寄せ、遠くをながめながら大和を懐かしんだと云われる、「顎かけ岩」や、ふもとの、梅で有名な吉野の地名は、御嶽山からの眺めが大和の眺めに良く似ていることから、奈良*の吉野から取ったとも云われています。一歩足を踏み込めば、靈気が一層と漂う奥宮の地。大和を偲ばせる此の地の何処かには、尊の使われた鎧が、妻の眠る東京湾を望みながら、尊の想いと共に、今もひっそりと鎮まっているのです。この美しい逸話への想いこそが、そして皆様の心に刻まれた見えな何かこそが、奥の院に鎮まっている本當の宝なのです。

院の頂上より少し下った場所に東向きに立てられています。毎年五月十五日には、神職だけでなく崇敬者の方々も山を登り男具那社祭を執り行われます。五月中旬頃にはシロヤシオ*の咲き誇る奥の院は、かつて多くの方が参拝しておりました。物事に対峙したとき、人は山頂を目指す様に登り行きますが、尊が美しい景色を眺めたように、時には後ろを振り返り、ゆつたりとした心を忘れず、歩みを進めていただけたらと思います。

登拝の折は、すばらしい自然を楽しみ、一休みしながらお歩きください。

を愛していたことが伺えます。ここ御岳山から大岳山にかけての山並みは、大和を思わせるところが多分にあり、奥の院から朝日に照らされた東京湾の光輝く姿を一望すると、まさに尊の足跡の場所とも思われ感慨が深くなります。そして、奥の院への参道には、弟橘姫を祀った碑や縁あると伝わる奇岩などもございます。日の出山には尊が後ろを振り返り、顎を寄せ、遠くをながめながら大和を懐かしんだと云われる、「顎かけ岩」や、ふもとの、梅で有名な吉野の地名は、御嶽山からの眺めが大和の眺めに良く似ていることから、奈良*の吉野から取ったとも云われています。一歩足を踏み込めば、靈気が一層と漂う奥宮の地。大和を偲ばせる此の地の何処かには、尊の使われた鎧が、妻の眠る東京湾を望みながら、尊の想いと共に、今もひっそりと鎮まっているのです。この美しい逸話への想いこそが、そして皆様の心に刻まれた見えな何かこそが、奥の院に鎮まっている本當の宝なのです。

院の頂上より少し下った場所に東向きに立てられています。毎年五月十五日には、神職だけでなく崇敬者の方々も山を登り男具那社祭を執り行われます。五月中旬頃にはシロヤシオ*の咲き誇る奥の院は、かつて多くの方が参拝しておりました。物事に対峙したとき、人は山頂を目指す様に登り行きますが、尊が美しい景色を眺めたように、時には後ろを振り返り、ゆつたりとした心を忘れず、歩みを進めていただけたらと思います。

第三十八回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者 金子千侍

特選

一席 元日になる日が御岳嶺に沈む 飯能市森泉 双輪
 二席 本堂の広さに寒さ加わりぬ 飯能市本多 多華
 三席 睡蓮の余白に鯉の跳ねし音多 摩市萩生田 芳孝
 四席 御輿の子水飲みに寄る勝手口多 摩市橋本 絢
 五席 深雪踏む音を一人で立てて行く 青梅市原島 康典
 秀逸(出句順)
 神代より芽吹く櫻に励まざる 札幌市細田 誠
 へば胡瓜育てて山の隠し畑 中野区辰巳 行雄
 夜神楽や神と踏みゆく舞台寒む 八王子市岡 喜彦
 春山や登り下りの笑顔かな 新座市長谷川 栄
 神代櫻こぼれ荒荒と冬に入る 松崎町山本 敏子
 万緑の押し合っている神の径多 摩市益田 温子
 秋の蠅ひとつ仕留めて妻の貌日 出町渡邊 敏雄
 かなかなや峠の茶屋の敗戦日 杉並区木村 聖哉
 茅屋根に数咲く百合や御師の宿 狭山市古谷 彰宏
 鬼灯や遠き神鼓に朱を深め 佐倉市丸若 加寿子

佳作

(出句順)

ハモニカや幼き頃の春奏す あきる野市平井 孝征
 霊山の守りは堅し蝮蛇草入 間市塚内 征支郎
 天近く御嶽の神の蟬時雨 宇都宮市加茂 都紀女
 浄土かや蓮花しようまの咲く原は 柏市水嶋 昭子
 神山の空晴れ渡り 鴨高市青梅市阿部 秋水
 御岳より遙かに筑波初御空 羽村市杉原 功一郎
 千年の神杉染めて初陽かな 青梅市服部 喜助
 静けさを極む御岳や夏社 松崎町田中 智子
 多摩地酒酌みて夜長となりけり 小金井市木村 息児
 邯鄲に夜の廊下の軋みかな 杉並区益子 和子

選者吟

応募総数 五五三句
 足太き耕馬祭に神乗せる

奉納俳句選評

特選一席

元日になる日が御岳嶺に沈む 森泉 双輪

(評)大晦日の太陽が御岳の嶺を染めながら沈みつつあります。この「没日」、明日は、新しい年、元旦の初日の出になるのです。感慨無量に浸る作者の心中が見事に詠まれました。

特選二席

本堂の広さに寒さ加わりぬ 本多 多華

(評)真冬の建物の空間と温度の物理的関係を、単純、明快な一句に表現されました。本堂の広さに応じて寒さが一段と募るので、それを「寒さが加えられた」と詠まれた作者の素晴らしい感性に感動です。

特選三席

睡蓮の余白に鯉の跳ねし音 萩生田 芳孝

(評)モネの絵のように池一面を埋めつくした睡蓮、葉の隙間を空に向けて鯉が跳ねる音が静寂を破ります。本句の魅力は、この隙間を「睡蓮の余白」と詠まれた作者の鋭い慧眼を称えます。

特選四席

御輿の子水飲みに寄る勝手口 橋本 絢

(評)掲句の驚きは僅か十七語の中に祭のドラマが納められているのです。御輿の子が喉が渴いて水飲みに寄った所は他人の家、それも勝手口たる勝手口へ、づかづか入って行って水を飲む、何んとも楽しい町ぐるみの大祭です。

特選五席

深雪踏む音を一人で立てて行く 原島 康典

(評)膝も隠れそうな深雪をしつかり踏みつけながら進んで行きます。総ての音を消してしまつた雪世界。その静寂を破っているのは自分一人の雪踏む音なのです。雪の界と、雪踏む音のメルヒェンです。

第三十九回

奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
- 一、受付は指定用紙にて投句箱へとする
- (郵送等直接の受付は致しません)
- 一、締切りは平成二十四年一月十五日
- 一、発表は平成二十四年三月中旬